

## 世界遺産石見銀山遺跡「大久保間歩のコウモリ」

島根県立三瓶自然館

大畑 純二

石見銀山遺跡は、2007年7月に世界遺産に登録された。ユネスコの諮問機関である国際記念物遺跡会議(イコモス)から、まさかの「登録延期」が勧告された後の大逆転登録であった。登録のキーワードになったのは「環境への配慮」であった。

この「環境への配慮」については、石見銀山の最盛期が江戸時代の初めまでで明治時代以後の大規模な鉱山開発をまぬがれたことや、日本列島における自然回復力の強さという「幸運」によるところが大きい。それに加えて、銀山で必要な木材や薪炭を確保するための植林が実施されたことや、「自然や物を大事にしなければ、バチがあたる」という日本人の考え方も見逃せないだろう。また、石見銀山は「工場の敷地内に住宅や商店や役所などがある」と言ってもよく、鉱山の環境破壊はそのまま居住環境の破壊となることから、できるだけ暮らしやすい環境を維持しようとの努力があったかも知れない。江戸時代もずっと後になってからではあるが、坑内の空気清浄装置なども考案された。

大正時代に入ると石見銀山は廃山に追い込まれるが、この後、大森の自然は急速に回復を始める。坑道をコウモリが利用するようになったのは銀山が廃山になったからであり、これは自然に配慮した鉱山開発の結果によるものではない。

「自然との共生」をうたい文句に登録された世界遺産石見銀山遺跡は、今後は新たな「自然との共生」と「環境に配慮した観光開発」を目指さねばならないだろう。

### 大久保間歩のコウモリ

大久保間歩は、石見銀山遺跡の中で最も重要な遺跡の一つであり、観光的にも極めて重要である。ここは同時に、洞穴棲コウモリ類の冬眠洞としても重要であり、その保護の必要性が叫ばれている。

大久保間歩には、4種類のコウモリ類が冬眠する。キクガシラコウモリ・モモジロコウモリ・ユビナガコウモリ・テングコウモリである。コキクガシラコウモリは、過去に1回1頭だけしか目撃していないので、この洞穴の利用種とは言い難い。

本坑道で冬眠数が最も多いのはユビナガコウモリで、2～3000頭の冬眠集団を見ることができ、過去最多数は7～8000頭であった。次いで多いのはキクガシラコウモリの3～400頭であり、テングコウモリもこの3月に17頭を数えている。ユビナガコウモリは、大田市東部から浜田市東部の間にある4つの洞穴を頻繁に行き来しながら利用しており、また、秋吉台と帝釈峽の鍾乳洞からの飛来も確認されている。大久保間歩は、県内では非常に重要なコウモリ冬眠洞である。

大久保間歩は来春から観光客に公開されるが、それによってコウモリが生息できなくなることがないよう、人間とうまく共存していく必要があるだろう。今後、「コウモリと人間との共生」は、石見銀山における新たなキーワードになるだろうと思われる。

(2007年12月9日)